くらがの

発行所　倉賀野神社
〒370-1201
群馬県高崎市倉賀野町 1263 番地
電　話　027-346-2158
ＦＡＸ　027-346-2184
例祭（秋季大祭）10 月 19 日
春季大祭　4 月 19 日
公式ホームページ　www.chinju.info/

三大神勅の一つ

「斎庭稲穂の神勅」と稲作り

日本の神話のなかには、神さまが語るお言葉（勅）がちりばめられています。それを「神勅」といいます。『日本書紀』のなかに、三つの代表的な神勅、すなわち「三大神勅」といわれるものがあります。ここに見てみましょう。

大むかしから高天原は、神々の住む天上の世界といわれてきました。天照大御神は太陽の女神といわれ、高天原の中心にいらっしゃいます。大御神が、天孫（大御神のお孫）の瓊瓊杵尊に、天上の高天原から地上の中つ国に天降るようにと命じ、その時におっしゃったお言葉があります。「日本はわたしの子孫が天皇となる国です。その皇位は天地とともに永遠に栄えることでしょう。」これを天壌無窮の神勅といいます。

同時に大御神は瓊瓊杵尊に鏡を授け、「地上に降り立った後はこの宝の鏡をわたしだと思い、大切にまつりなさい。」と命じられました。これを宝鏡奉斎の神勅といいます。鏡はのちに伊勢の神宮におまつりされるようになりました。

天照大御神は、さらにもう一つおっしゃいました。「わたしが高天原で育てた神聖な稲穂をあなたに授けましょう。」訓読原文によれば「吾が高天原に所御す斎庭の穂を以て、亦吾が兒に御せまつるべし。」これが斎庭稲穂の神勅です。人々の生活の「食」のおおもとになるようにと、大切な稲を地上に授けられたのです。天皇陛下のお田植えの御姿が思い浮かびます。

宮中や全国の神社でおこなわれる新嘗祭（秋まつり）は、天照大御神からの賜りものであるお米の収穫に感謝を申し上げるものです。

倉賀野神社においても境内の神饌田や、氏子農家から献納いただいた稲のお初穂を年ごとに神前にお供えします。日本の文化、たいせつな心を未来に伝えてまいりましょう。

毎年、氏子農家ご奉納の懸税が社殿正面に吊り下げて供えられる。（右写真は令和の御大礼の秋に。）

今年６月、倉賀野中の「やるベンチャー」職場体験学習では、２年生が神饌田の田起こしをおこなった。

６月 22 日、神社総代会が集まり境内で御田植祭を斎行。中学生有志も参加してお田植えの儀も無事におこなわれた。

ことし秋の神饌田。10 月 12 日には抜穂祭（稲刈り）がおこなわれる。

８月、境内の田んぼに羽を休めるミヤマアカネ。

神棚に 今日も家族の ありがとう

神宮大麻と氏神さまのお神札をおまつりしましょう

お伊勢さま（神宮大麻）と地元の氏神さまの神札、また崇敬する神社の神札をおまつりします。

お家のなかに神さまへの祈りと感謝を申し上げる場所のあることは、とても幸せなことです。

神棚のことやお神札のことについては、どうぞ倉賀野神社にお尋ねください。

社務所☎０２７（３４６）２１５８

二百四十年前の浅間山大噴火と「雲龍図」

神社の雲龍図は、江戸時代の天明七年（一七八七）狩野探雲の作画で、縦３m、横2.3mの大作。木の大板四枚を繋いである。探雲は上州野上村（現富岡市）の出身で、江戸の狩野派に学び法眼の称号を拝領し活躍、晩年上州に戻り七日市藩のお抱え絵師をつとめたという。県内の神社に雲龍図、寺には涅槃図などを数多く描き残している。

この雲龍図はもとは天井画であったが、元治二年（一八六五）の社殿建て替え時に取り外され、神輿蔵のなかに保存されていたといわれる。現在は拝殿内の南側壁面に復元されている。

天明三年（一七八三）八月に上信国境の浅間山が大噴火。その四年後に奉納されたもので、人々の復興への願いが込められている。大災害からことしは二百四十年となる。

倉賀野神社奉賛会のご案内

奉賛会に加入して神様の御守護をいっそうに厚く戴きましょう。

○奉賛会 年会費
正会員 二千円　特別会員 一万円

祭典の振興、文化財の保存継承、神域の緑化保全にどうぞお力添え下さい。

お問合せ☎０２７（３４６）２１５８

群馬県神職青年会 一行が正式参拝

九月九日、群馬県神職青年会の一行が来社、高橋和昭会長を始め会員十三名が御社殿内で玉串をささげて拝礼した。

同会は県内神社に奉職する四十歳以下の青年神職の集まりで、日頃から相互の研鑽に向けた活動につとめている。

好天のもと境内の清掃奉仕に汗を流した後、参集殿内に立ち寄り、髙木直明宮司も同席して質疑応答を交え懇談のひとときを過ごした。

正式参拝（上）と境内清掃奉仕（左）。群馬県神職青年会・Facebook より

新任ご紹介　五月、倉賀野神社総代会長に上二区の塚越宏氏が就任されました。今後とも総代会に氏子皆様のご協力をお願い申し上げます。

追悼▼総代会長の高橋義明さんがことし四月に逝去されました。享年八十三歳▼平成元年より倉賀野神社総代の任にあり、同十七年より会長。二十一年より高崎市神社総代会長、また二十三年より群馬県神社総代会副会長をつとめられた▼「お祭りを楽しみましょう」が合言葉で、祭典の振興に力を注がれ、直会のお神酒に会話が弾んだ▼令和の御本殿屋根替事業では、先頭に立ち尽力いただいた。けれどその文化財修理報告書の完成は、見ていただけなかった▼沖縄の本部流空手師範として青少年を指導。芭蕉を敬愛し草枕旅に出ては、あまたの土産話をくださった▼本紙も度々に寄稿をお願いしている。とかく内容の硬くなりがちな社報の紙面に、心やさしいユーモアを添えてくださった。読み返しては今、泣き笑いしてしまうのである。ありがとうございました。御霊安かれと祈ります。

宮司髙木直明 記

神社由緒略記

○御祭神は大國魂大神。国土発展の神であるとともに、医療看護・縁結び・夫婦和合の御神徳あらたかである。

○第十代崇神天皇の御代、皇子の豊城入彦命は父帝から東国を平定するように命ぜられ、出立の時に御愛石（亀形の自然石）を授けられた。すなわち倭大國魂神の御分霊といわれ、命は当地に着くと御愛石を御魂代として祭祀をなされたという。二千年昔の亀石は「ご神体のクニタマさま」として今も御本殿に奉安される。

○大同二年（八〇七）、坂上田村麻呂の東征凱旋の途次、この地で造営舞楽を奏上、「翁面」が社宝として伝わる。

○中世の倉賀野の周辺地域には「宮原荘」の名がのこり、飯玉大明神（倉賀野神社の古称）は上野国群馬郡宮原荘の総鎮守とされた。社宝の「飯玉縁起」一巻が伝わる。

○武蔵七党の一つ、児玉党の余流秩父三郎高俊がこの地を領知、倉賀野氏の始祖となる。建長五年（一二五三）、三郎高俊による社殿造営。やがて烏川左岸要害の地に倉賀野城が築かれ、神社は倉賀野氏の氏神として社殿の修復・造営が重ねられた。

○永禄年間には、倉賀野氏の後継の金井淡路守による社殿の修復。享保十九年（一七三四）に淡路守の子孫が奉納した「飯玉大明神」扁額がいま拝殿に掲げられている。

○江戸時代、倉賀野は中山道の宿場として、また利根川水運の最上流の河岸として賑わう。神社は七ケ郷村々の総鎮守として広く崇敬を集めた。

○明治四十二～三年に近隣神社を合祀して倉賀野神社と改称。地域随一の古社として参拝者が絶えない。

おもな年間祭事

一月一日	歳旦祭
一月十五日	境内社 北向道祖神大祭
二月十一日	境内社冠稲荷初午大祭
四月十九日	春季大祭
六月中旬	御田植祭
六月三十日	夏越大祓式
十月中旬	抜穂祭
十月十九日	秋季大祭
十一月十五日	七五三詣
十二月三十一日	年越大祓式

倉賀野神社・創作紙芝居

「大国主神の冒険」②

前回までのあらずじ　兄弟たちの旅の途中、大国主神（大国主命ともよびます）が因幡の白兎を助けてあげると、兎は「あなたは将来きっと立派な神さまとして、この国を治めるようになりますよ。」とお礼を言いました。

一行が伯耆の国（今でいう鳥取県のあたり）の山の麓に来ると、意地悪な兄たちは大国主に言いました。「赤い猪がこの山にいる。悪い猪なので捕まえなきゃならない。俺たちが上から追い落とすから、お前が下で待ちかまえていて、捕まえるんだぞ。」

でも赤い猪というのは、じつは真っ赤に焼いた大きな石だったのです。

待ち受けていた大国主は、大やけどをしてしまいました。大国主の母神（お母さん）はそれを聞いて泣き悲しみ、天の高いところにいる神産巣日神という神さまにお願いしました。「どうか助けてあげてください。」

天の神さまは、すぐさま、赤貝と蛤貝の神をつかわして治療に当たらせました。赤貝の貝殻を削り落として粉にします。その粉を蛤の汁でよく練ると、お乳のようになります。それを全身に塗ってあげたのです。

すると、死んだとばかりと思っていた大国主神はたちまち生き返り元気に歩き出したのでした。

しかし、そのあとも兄の神々は悪いたくらみを思いついてはたびたびに危ない目に遭わせてきます。そこでお母さんの神は大国主神にいいました。「早くお逃げなさい。須佐之男命がいらっしゃる根之堅州国へおいでなさい。」

神社の御祭神の大国魂大神は大国主神の荒魂とも言い伝わり、また神社の境内には甲子大黒天社がまつられています。このことから神社の創作紙芝居がつくられました。

古記録探索

「元治二年（1865）鎮火祭」

江戸後期、飯玉大明神（現在の倉賀野神社）の神主高木出雲が記した社務の記録簿は『納戸日記』と呼ばれ、今日まで引き継がれている。その中の元治二年（一八六五）二月の記事である。

＊　＊　＊

中山道の宿場町倉賀野はたびたび火災に見舞われている。なかでも天保六年（一八三五）の大火は、民家三百二軒、本陣、脇本陣などが焼け落ちるなど被害が甚大であった。安政三年（一八五六）にも大火があり、民家一六三軒のほか、またも本陣を焼失している（『文献による倉賀野史』第三巻より）。

日記には、天保の大火から三十一年の区切りの年に、宿をあげて鎮火祭を執行したと書かれている。鎮火祭は「ほしずめのまつり」ともいわれ、火災防止を祈って古来おこなわれてきた神事である。

「元治二己丑年二月二十一日控」として、「当二月二十三日、彼岸の中日に相当り申し候。去る天保六乙未年二月二十三日彼岸の中日にて出火いたし町中類焼いたし候処、当年其の年季（年忌）に相当り当年迄三十一年相来たり申し候。夫れに付、火元用心厳重に仕り候。是に依り鎮守社におゐて鎮火祭執行仕り候。尤も二十一日より相始め二十二日三神主にて相勤め、二十三日は私一人にて相勤め申し候。」

当時の暦では、お彼岸は二月。鎮守社の飯玉さまの前での祭事に「火元用心厳重に」と火防の誓いを新たにした。「三神主にて相勤め」とは、倉賀野宿内の三つの神社、すなわち飯玉神社（上町）の高木出雲、八幡神社（田屋町）の田口近江、諏訪神社（下町）の高木信濃の三名をいう。

続いて日記には「町々札二枚、御備水一樽」とあり、また上の写真の図に示された札には「鎮火祭 吉事 真璽 三社神主」、樽には「鎮火水 三社神主」と書かれている。氏子の町内ごとに御神札と「鎮火水」を満たした樽が配られたのであろう。

＊　＊　＊

元治二年、この鎮火祭の翌月の三月十九日に、予てより工事中であった御本殿（現存）の上棟式が盛大に行われた。その一大慶事を迎える前に執行された鎮火祭は、災いを広く除けて地域が本来の清々しい状態に復することを願う、「祓」の神事であったとも思われるのである。

春祭・秋祭に神前奉納

太々神楽保存会
八幡の舞

倉賀野小児童
豊栄舞

『高崎市指定重要文化財 倉賀野神社 本殿保存修理報告書』を刊行

令和御大礼記念の本殿屋根替事業は、昨年四月に竣功奉告祭をめでたく斎行。その後も引き続き文化財調査が進められ、このたびその保存修理報告書が完成しました。

県・市文化財保護審議会委員の村田敬一氏の指導の下に作成されたもので、工事記録だけでなく彫刻や古文書の写真も数多く掲載されています。

非売品ですが県立、高崎市立図書館や倉賀野公民館に開架、また社務所でも閲覧できます。ご希望の方にＤＶＤ版の配布を今後に予定しています。